



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	毛沢東の遊泳と水中の英雄：文革期の連環画に描かれた知識青年像
Author(s)	藤井, 得弘
Citation	連環画研究, 1, 35-46
Issue Date	2012-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98377
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98377
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_1_35-46.pdf



毛沢東の遊泳と水中の英雄

——文革期の連環画に描かれた知識青年像

藤井 得弘

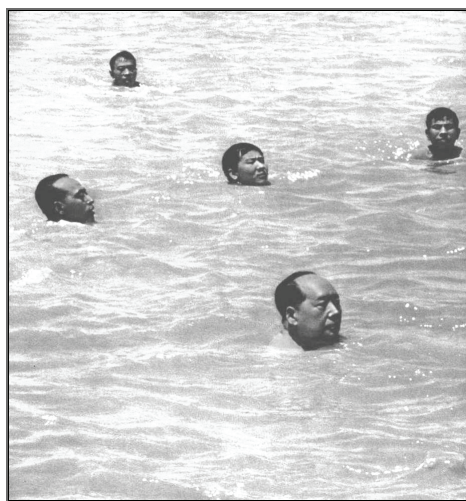
毛沢東の長江遊泳

1966年7月16日、73歳の毛沢東は長江での遊泳を行った。この遊泳については、直前の時期に国際的な情報として何回も流れた「毛沢東死亡説」を払拭し、みずからの健全ぶりをアピールするためのパフォーマンスであったとされている¹。

そもそも毛沢東は水泳好きとして知られていた。長江での遊泳も、最初に行ったのは1956年のことであり、それから繰り返して行われている。中でも政治宣伝的意味合いが強かったのが、文革開始直後に行われたこの遊泳であった。

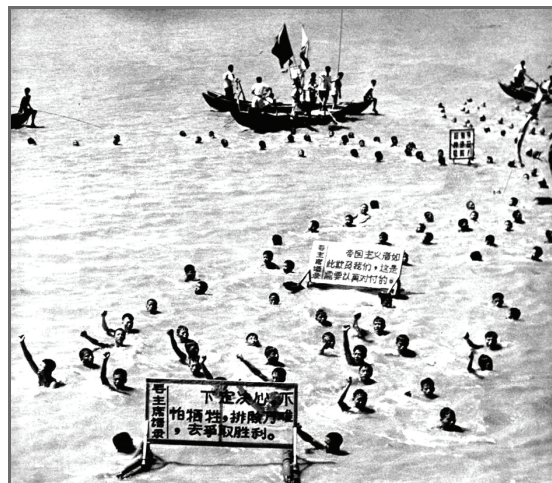
翌7月17日には、共産党の機関紙『人民日報』が社論「毛主席のあとについて大風大浪の中を前進していこう（跟着毛主席在大风大浪中前进）」を掲載、後にこのフレーズは新たなスローガンとして用いられるようになる。「大風大浪」という語は、同記事に引用されている「大風大浪も恐るべきものではない。人類社会とはまさに大風大浪の中から発展してきたものなのだ（大风大浪也不可怕。人类社会就是从大风大浪中发展起来的）。」という毛沢東の言葉²を踏まえたものだろう。

さらに、同年の『人民画報』10月号には、この遊泳大会の様子が詳述され、写真も掲載されている（【図1】）。そして、この1年後には、「毛沢東長江遊泳1周年記念遊泳大会」が開催され、翌日の1967年7月17日の『人民日報』でも「永遠に毛主席とともに大風大浪の中を前進しよう（永遠跟着毛主席在大风大浪中前进）」という記事で大々的に報じられた。ちなみに、この1周年記念遊泳の様子を収めた写真は、『人民画報』1967年9月号の表紙を飾っている。その後も、毎年7月16日になると遊泳大会が行なわれ、『人民日報』でも、そのたびに「毛主席とともに前進しよう」というスローガンとともに大々的に報道されている³。



【図1】長江を遊泳中の毛沢東（画面右下）。『人民画報』1966年10月号より。

また、同号の『人民画報』に掲載された写真【図2】には、手前の水泳隊員が持っているプラカードに、「決心を下し、犠牲を恐れず、万難を排して、勝利を奪取しよう（下定決心，不怕牺牲，排除万难，去争取胜利）」というスローガンが書かれている。これは、もとは中国共産党第7届全国代表大会（1945年6月）の閉幕の言葉だったもので、後に「老三篇」のひとつとして扱われた、「愚公、山を移す（愚公移山）」に記されている⁴。このスローガンもまた、同時期の新聞記事など



【図2】毛沢東とともに遊泳した軍人水泳隊員。
『人民画報』1966年10月号より。

で繰り返し用いられた。文革期の連環画においては、こうしたスローガンはしばしば巻頭や文中に引用されており、絵の一部として読めるように描き込まれる場合もある⁵。

さきに挙げた『人民日報』の論説では、「大風大浪の中で前進しよう」といったように、「大風大浪」という語が繰り返し用いられているのだが、この語と美術との関係について、駱思穎氏は、「大風大浪の中で成長する（在大风大浪里成长）」というテーマが、六、七十年代における中国美術の重要な題材のひとつであったことを指摘している⁶。駱氏はとくに児童が描かれた絵画に注目して分析を進めておられるのだが、「大風大浪中の英雄」という主題は、児童に限らず、解放軍の戦士や知識青年の姿を通して描かれており、大浪の中にありながらも毅然と振る舞う英雄の姿は、同時期の絵画やポスターの随所に認めることができる。ならば、彼ら英雄の姿は、連環画においてはどのように表現されていたのだろうか。

洪水で犠牲となった知識青年——金訓華

まずは、洪水に身を投じて犠牲となった、ある知識青年の話を紹介したい。

1969年5月、20歳の青年金訓華は、下放政策によって上海から黒龍江省に向かい、遜克県のとある部隊へと入った。しかし、同年8月15日に洪水が発生、急流に飲みこまれた、国家の財産たる電柱を拾い上げようとして、流れに身を投じ、命を落とした。

彼のこのエピソードは、同年10月末に『解放日報』や『文匯報』などで続けて報道された。あらためて大きく取り上げられたのは、同年末に刊行された『紅旗』第12号の「革命青年の模範（革命青年的榜樣）」と題された評論においてであり、同記事は12月4日の『人民日報』にも転載されている⁷。その『紅旗』の記事では、金訓華の事績を称賛して、次のように記している。

生死の正念場という試練を前にして、彼が思い至ったことは、「人民の為に服務することこそ、価値ある死である」ということであった。祖国の財産を守るために洪水と戦うその過程において、凶暴な巨浪が三度彼を險悪なる渦へと巻き込んだが、彼は三度懸命に水面に頭を出し、風を斬り浪を分けて、前へと突き進み続け、国家の物資を救い出そうとした。金訓華はさすがは毛主席の紅衛兵、三度死の脅威に直面し、三度死の脅威と戦って勝利し、ひとたびごとに「一に苦しみを恐れず、二に死を恐れ」ないという、無産階級思想の高みへと登りつめていったのである。⁸

ここでは、金訓華の行動について、「人民の為に服務することこそ、価値ある死である（为人民服务，就是死得其所）」、「一に苦しみを恐れず、二に死を恐れない（一不怕苦，二不怕死）」といった毛沢東の言葉に基づいて行動したかのように語られ、「革命青年の模範」として評価されている。ここでは、水中での様子が「風を斬り浪を分けて」などと、「風」や「浪」といった語を用いて表現されている点にも留意しておきたい。

また、同号には金訓華の日記が抄録されており、7月19日と20日の日記は、続けて次のように掲載されている。

林副主席（林彪）は「九大」の報告において我々にう告げた。「階級敵がもし再び 風を起し、波を立てたなら、群衆を発動して、やつらをふたたび打ち倒せばよいのだ。」⁹〔※下線は筆者による。以下同様。〕（7月19日）

今日の昼、川に泳ぎに行ったのだが、川辺にやって来て、川の水流がかくも急であるのが見えると、心の中で、入るのか、入らないのか、と思った。入るにしても、この水流はまったく恐ろしい。このとき、私の頭には、毛主席の教えが思い起こされた。「大風大浪も恐れてはいけない。人類社会は大風大浪の中でこそ発展してきたのである。」水が急ならば、人の勇敢さや機智を鍛えることができる。私は飛び込んでいき、数十メートル泳いだ。（7月20日）¹⁰

19日の記述に引用されている林彪の言葉に見える「九大」というのは、中国共産党第九屆中央委員会第一次全体会議（1969年4月開催）のことである（以下、「九大」）。 「風」や「浪」という語は、階級敵によって引き起こされる障害や困難を表しているものと考えられる。一方、20日の記述に引用された毛沢東の言葉に見える「大風大浪」という語は、直前の19日の日記における「風」や「浪」の意味合いを含みつつも、社会における困難や障害といった、より広い意味で用いられているだろう。

注目したいのは、20日の日記に見える、金訓華が川を泳いだときの記述である。彼が泳いだ距離は数十メートルだけだったようだが、ここでは距離が問題なのではない。

重要なのは、金訓華が毛沢東の言葉の導きのもとに急流へと身を投じたように書かれていることである。ここには、「浪(困難)」を恐れてはいけないという毛沢東の抽象的な言葉が、「浪(急流)」に身を投じるという具体的な行為へと結実する瞬間が記されている。そして、金訓華のこの模範的な振る舞いが、8月の洪水での英雄的な事績につながったということが、暗に示されているのである。

こうした記事や日記のほか、同号の『紅旗』には、上海の画家、逸中(徐純中)の描いた「毛主席の紅衛兵——向革命青年的榜样金訓華同志学习(毛主席の紅衛兵——革命青年の模範金訓華同志に学ぼう)」という題の水彩画が掲載されている。大水の中で金訓華が左手を高く掲げながら決然と水流に向かう様子を描いたものであり¹¹、連環画『毛主席の紅衛兵——金訓華的英雄故事』(以下「連環画『金訓華』」)の表紙にも、同じ構図の絵が用いられている(【図3】)¹²。『紅旗』の絵と記事が時期的に先行しており、間を置かずに連環画となったものと考えられる。切手から毛沢東時代の中国を読み解く内藤陽介『マオの肖像』では、同じ絵を用いた金訓華の記念切手が1970年2月に発売されたことが指摘されているが¹³、連環画『金訓華』はそれよりも3ヶ月早く、1969年12月にはすでに刊行されており、『紅旗』の記事とほぼ同時期に刊行されていることがわかる。この連環画が、切手のように単なる記念として出版されたのではなく、党の機関紙が金訓華のことを大きく取り上げたのとはほぼ時を同じくして刊行されている点には、注目しても良いだろう。

なお、これと同じ構図の絵は、同連環画の表紙だけでなく、第36コマ目にも用いられている。そこに記された文には、先に紹介した『紅旗』の記事にも見られた、「人民の為に服務することこそ、価値ある死である」というスローガンが、金訓華の台詞として語られている(【図4】)。このあたりの話の流れは、1969年10月27日の『黒龍江日報』に掲載された、金訓華の事績を讃えた記事を下敷きとしているものと思しい。¹⁴



【図3】連環画『毛主席の紅衛兵——金訓華的英雄故事』(上海人民美術出版社、1969.12)



【図4】同連環画第36コマ目。

また、同連環画の巻頭には、毛沢東による、「我賛成這樣的口号“一不怕苦，二不怕死”（私はこのようなスローガンに賛成する。「一に苦しみを恐れず、二に死を恐れず」）」という言葉が置かれている。この言葉は、「九大」の席上で毛沢東が発した言葉であり、ほどなくして、毛沢東の「最新指示」としてスローガン化した。「一に苦しみを恐れず、二に死を恐れず」という部分のみが引用される場合もある。

以上のように、連環画『金訓華』には、同時期の党機関紙に掲載された金訓華に関する記事や絵画、そして彼の日記といったものが、色濃く反映されているのである。

洪水で死んだ11人の知識青年——連環画『黄山青松映丹心』

そもそも、下放された知識青年を称揚する記事が掲載された背景には、大規模な「上山下郷」運動の影響があっただろう。

都市の知識青年を農村に定住させ、生産活動に従事させるこの運動は、50年代中頃に始まり、文革初期には一時中断していた。しかし、68年12月22日から25日にかけて、『人民日報』が、毛沢東の「知識青年が農村に行き、貧農下層中農から再教育を受けることは大いに必要だ（知識青年到农村去，接受贫下中农的再教育，很有必要）」という最新指示のもとに大きく呼びかけると、大規模な「上山下郷」運動が起こった¹⁵。

模範的な知識青年が称賛され、話として取り上げられたのは、毛沢東の指示の正しさをアピールするためであったと考えられる。こうした背景のもとに取り上げられた知識青年のなかでも、金訓華はとくに代表的な人物だったようだが、洪水で犠牲となった知識青年の話には、他にも連環画となったものがある。

1969年7月5日、下放して安徽省南部の黄山茶林場に来ていた上海出身の11人の知識青年たちが、洪水から倉庫の財産を守るべく、肩を組みながら水流に立ち向かい、命を落とした。このエピソードに題を採った水彩画が、同年のうちに劉柏栄によって描かれ、「胸懷朝陽何所惧 敢将青春献人民（胸に朝陽を抱けば何の畏れるところがあろうか 進んで青春を人民に捧げよう）」という題で発表されている。そのポスターには「向“一不怕苦，二不怕死”的上海市黄山茶林場十一位知識青年學習“一に苦しみを恐れず、二に死を恐れ”なかった、上海出身の黄山茶林場の11人の知識青年に学ぼう）」というスローガンが記されている。

この後さらに、その絵を表紙に用



【図5】連環画『黄山青松映丹心』（上海人民美術出版社、1971. 9）表紙絵。

いた連環画『黄山青松映丹心』が刊行されている【図5】。同連環画の巻頭には、毛沢東の言葉として、さきに挙げた、「知識青年が農村に行き、貧農下層中農から再教育を受けることは大いに必要だ」という指示と、劉柏栄が描いたポスターと同じ「一に苦しみを恐れず、二に死を恐れず」というスローガンが、合わせて置かれている。

あらためて表紙の絵を見てみると、左から二番目の女性は、『毛主席語録』を左手に掲げている。水流に流されないように肩をがっちりと組むことより

も、水の中であってなお『毛主席語録』を持っていることのほうが描き方として優先されている点は興味深い¹⁶。同じ場面を描いた同連環画のコマも、この表紙絵の描き方に倣っており、女性の手には『毛主席語録』がしっかりと握られている（【図6】）。水中であってなお『毛主席語録』を濡らすことなく掲げるというモチーフは非常に好まれたらしく、同時期の絵画や連環画によく見られる。¹⁷

思えば、冒頭で紹介した1966年の長江遊泳の段階で、武漢の軍人水泳隊員たちは毛沢東の言葉が書かれたプラカードを持って遊泳していたのであり、『毛主席語録』を手浪の中を突き進むというコンセプトは、すでにこの時に見えていたと言えるだろう。

『毛主席語録』を手放さぬ人びと

ここで、水中でも『毛主席語録』を手放さない英雄が登場する、ほかの連環画も紹介しておこう。

連環画『英雄五少年』（江蘇省新華書店、1970. 6）は、1968年2月28日、江西省彭沢県の湖西公社のある隊の少年英雄5人が、山火事を食い止めようとして犠牲になった話を描いたものである。燃え盛る炎の中で、彼らは毛沢東の教えを思い出しながら火炎に立ち向かってゆく。その場面を描いたコマでは、5人は腕を組み、端か



（13）十一位小将要一个一个走过去比较困难，于是，他们就手挽着手，肩并着肩，高声朗诵毛主席教导：“下定决心，不怕牺牲，排除万难，去争取胜利。”顶着疾风暴雨，迎着凶猛的洪水，一步一步地迈上了公路桥。

【図6】同上第13コマ目。表紙絵と同様、端から2番目の女性は『毛主席語録』を高く掲げている。



12. 他们高声朗读着毛主席的教导：“下定决心，不怕牺牲，排除万难，去争取胜利。”一个个象钢铁铸打的金刚，屹立在火海之中，咬紧牙关，忍着剧痛，手挽着手，筑起一道人的“防火墙”，坚决不让火浪前进一步！

【図7】連環画『英雄五少年』第12コマ目。

ら2番目の男の子は手に『毛主席語録』を持っている。つまり、先に取り上げた連環画『黄山青松映丹心』の表紙絵と似たような構図が用いられているのである(【図7】)。時期的に見ても、この連環画の書き手は、劉柏榮の絵のことが念頭にあったものと思われる。また、同コマの記述には、〈坚决不让火浪前进一步! (断固として火の波に譲ることなく一步前進したのである!)〉とあり、ここでの炎は、これまで見てきた水と同様に、「浪(=立ち向かうべき困難)」として表象されているものと考えられる。

『胸懷朝陽戰凌洪』(山東人民美術社、1970.11)は、1969年2月10日、山東省平陰県の黄河沿岸地区で百年に一度の大洪水が発生した際に、済南の人民解放軍が、みずからの命を犠牲にして人民の命と財産を守り抜いた、という話を描いている。

この連環画では、主人公が人民解放軍ということも手伝ってか、毛沢東崇拜の過剰さが目立つ(【図8】、【図9】)。水中の人物の表現についても、人物がより立派に描かれており、『毛主席語録』だけでなく、進軍ラッパや毛沢東の肖像といった、記号的な要素が数多く描きこまれている。タイトルに見える「胸懷朝陽」という語は、先の劉柏榮の絵のタイトルにも用いられていたが、毛沢東思想を胸に抱くことの隠喩であろう。文革期において、神格化した毛沢東は、太陽に見立てられていた¹⁸。同連環画の別のコマでは、太陽の中に毛沢東の顔を配置したような絵も描かれている。



【図8】『胸懷朝陽戰凌洪』第23コマ。解放軍の戦士が左手には『毛主席語録』、右手には進軍ラッパを持っている。



【図9】同左第33コマ。解放軍の戦士が『毛沢東語録』を掲げながら激流を泳いでいる。左上には毛沢東の言葉が直接描き込まれている。

そして、この連環画とおそらくほぼ同時期であろうが、同じく「胸懷朝陽(胸に朝日を懷く)」という語を冠した『胸懷朝陽戰惡浪』(天津人民美術社、出版年不明)という連環画も刊行されている。1968年10月5日、一艘の船が嵐に遭って沈没してしまうが、『毛主席語録』の教えのもと、互いに助け合いながら荒波を乗り越え、最後は別の漁船に助けられて命拾いするという話である。

この連環画もまた、毛沢東崇拜がかなり色濃く反映されている。とくにその様子は表紙に顕著に表れており、波間に浮かぶ人びとは、『毛主席語録』だけでなく、国旗や毛沢東の肖像画まで持っている（【図 10】）。中のコマの絵についても、その多くが、毛沢東の肖像や語録を手に浪の中を突き進む人々の様子を描いている。【図 11】の第 31 コマ目はその一例だが、毛沢東の長江遊泳のときにも水泳隊員が掲げていた、「決心を下し、犠牲を恐れず、万難を排して、勝利を奪取しよう（下定決心，不怕牺牲，排除万难，去争取胜利）」というスローガンが見える。このスローガンは、「九大」以降、「一に苦しみを恐れず、二に死を恐れず」と合わせて用いられるようになる。

1970 年代初頭においては、洪水に立ち向かって犠牲となった知識青年の話が称揚され、新聞などで模範として繰り返し報道された。そして、それらの

話は連環画の題材としても取り上げられ、その図像表現においては、毛沢東の教えを胸に、階級敵やあらゆる困難を乗り越えて突き進んでゆこうとするさまが、『毛主席語録』を持って波間を突き進むという形象によって、象徴的に表現されたのである。

そして彼らは模範となった——連環画『青春火花』

文革期においては、有名無名の人物たちが、見習うべき模範的人物として称揚された。そして彼ら模範的な人物は、その規範性が発揮されるべき状況下において、先行する模範的人物のエピソードを想起し、思想や境遇を共有して困難を克服するという仕方のみずからの規範性を示した。それは、洪水で犠牲となった人物たちについても例外ではない。

連環画『青春火花』（上海人民美術出版社、1972. 7）は、上海の知識青年趙凌華が、「上山下郷」運動のもと、仲間たちとともに国営農場で働くなかで、困難に打ち勝って任務を果たすさまを描いている。



【図 10】連環画『胸怀朝阳战恶浪』表紙絵。



【図 11】同上第 31 コマ。

話は大きくはふたつの部分から成っており、前半は、階級敵である殷士貴を打倒する話、後半は、大雨で決壊した堤防を修復すべく、解放軍の戦士と一致団結して解決する話である。

この話を「浪」というキーワードで考えると、前半では、抽象的な意味における「浪（階級敵）」と戦い、後半では、実際の洪水における「浪」と戦っていることになり、「浪」と戦う」というコンセプトに貫かれた話として読むことができる。

また、作品中には、筋立てに大きくは関係しない場面が挿入されている。それは、堤防を修復する前の部分である。ある晩、主人公の趙凌華は「防汛（洪水防止）会議」を終えて連隊へと報告しに帰ると、ちょうど新入隊員の歓迎会を行っていた。趙凌華はそこで現代京劇『紅灯記』の一段「打不尽豺狼決不下戰場（残忍な悪党を倒しきらなければ戦場は決することができない）」を披露するのである（【図12】）。

『紅灯記』は、1966年に指定された、八つの「革命模範劇」のひとつであり、1970年には映画化されている。話の筋立ては、次のようなものである。

日中戦争期のこと、共産党の地下工作員をしていた鉄道労働者李玉和は、党から無線の暗号表を届ける任務を受けるが、日本軍に阻まれ、母親の李奶奶とともに処刑される。娘の李鉄梅は父の遺志を受け継ぎ、暗号を遊撃隊に届ける任務を果たし、遊撃隊によって日本軍は全滅する。

玉和が処刑された後の場面で、李鉄梅は玉和の信号灯とともに彼の遺志を受け継ぐのだが、そのとき李鉄梅が信号灯を掲げて歌うのが、連環画『青春火花』で趙凌華の歌った一段である。夜遅くに帰った趙凌華は、夜道を照らすのに使っていたランプを



【図12】連環画『青春火花』第110コマ。



【図13】1968年に人民美術出版社から刊行されたポスター「革命を最後まで行おう」。手前の女性民兵は、信号灯を掲げる李鉄梅の視線の先を見ている。

信号灯に見立てて歌った。洪水に立ち向かい、堤防を補修する展開の前に挿入されたこの場面は、趙凌華が李鉄梅の志に同調し、洪水との戦いに向かうことを暗示しているものと考えられる¹⁹。それでは、この後の洪水の場面はどのように描かれているのだろうか。

趙凌華は歌い終わると、みなに防汛指揮部からの指示を伝える。それは、「今夜大潮が来るから戦闘準備をして上からの命令を待て」というものであった。やがて潮が堤防を越え、決壊した箇所を直すための土嚢も使い果たすと、共産党員たちは次々と水の中へ飛び込み、腕を組んで、体を張って浪を防ごうとする。

この時、趙凌華は、隣で腕を組んでいた党員の楊小麗に、抗うことはできるかと尋ねると、彼女は「金訓華や黄山の十一人の英雄が激流と戦った情景を思い浮かべれば、このちょっとした波風なんかたいしたことないわ」²⁰と答える（【図14】）。

つまり、楊小麗は、英雄としての金訓華や黄山の11人の知識青年とみずからを重ね合わせることによって、水流に耐えているのである。

また、次に描かれた、みなが腕を組んでいる場面は、その十一人の知識青年が描かれた「胸懷朝陽何所惧 敢将青春献人民」（【図5】）を彷彿とさせるもので、ふたつの絵や話が同じ系譜上にあることを思わせる（【図15】）。これらの絵には、先に見てきたような、手に『毛主席語録』を持った人物は描かれておらず、一時期の過剰さは、なりを潜めているように見える。しかし、洪水や水流に立ち向かうという話においては、金訓華や黄山の11人の知識青年たちのエピソードが英雄的な事績として語りつながれており、図像的な表現においても、ふたつのエピソードを描いた絵に見える表現が継承されていることがうかがえるだろう。



(137) 海水冰凉，寒风刺骨，大伙儿的脸冻得发紫了，嘴唇上咬出了一个个血印。“小杨，能顶住吗？”赵凌华问身旁的杨小丽，小杨充满信心地回答说：“想起金训华和黄山十一位英雄与激流搏斗的情景，这点风浪又算得了什么！”

【図14】連環画『青春火花』第137コマ。
画面右が趙凌華、左が楊小麗。



138 “对！浪再高没有我们抗灾夺丰收的斗志高，风再大没有我们为中国革命和世界革命奋斗终生的决心大！”赵凌华说出了大家的心里话。此刻风浪越来越大，大家的胳膊越挽越紧。

【図15】同上第138コマ。人々が腕を組む様子、片腕を組まずに胸の前に掲げる趙凌華（画面中央上側）、そして個々のポーズや視線に注目したい。

思いが重なるその時に

本稿では、毛沢東の遊泳から始まったスローガンが、60年代末の知識青年の「上山下郷」運動の高まりを背景として、洪水へと身を投じる知識青年のエピソードと結びつき、それらが同時期における新聞報道や絵画表現をベースとして連環画へと結実する過程を追った。

それらの連環画においては、「大風大浪」に立ち向かうという大きな主題が通底しているなかで、その時期その時期の毛沢東による「最新指示」や他ジャンルの文芸とも結びつきながら、青年たちは英雄として再創造されてゆく。そして彼らは、その身にさまざまなスローガンや過去の英雄たちの思いを背負いつつ、水中へと身を投じたのであった。

このたび取り上げた水中の英雄に関しては、知識青年の話だけでなく、子どもや解放軍の軍人が水中で敵と戦って勝利するといった話も、連環画には数多く見られる。それらについては、機会を改めて考察することとしたい。



ポスター「金訓華同志に学ぼう」(上海人民出版社、1973)。左側には、金訓華を描いた絵を見て学んでいる子どもが描かれている。手前の2人も、金訓華に学ぼうと、決意を新たにしているのだろうか。

注

¹ 草森紳一『文化大革命の大宣伝(上)』(芸術新聞社、2009)「毛沢東の「長江遊泳」」。同論考では、毛沢東の長江遊泳が政治宣伝として語られていく経緯が論じられている。

² 毛沢東「在中国共产党全国宣传工作会议上的讲话」に見える言葉。『毛沢東著作選読(甲種本)』(人民出版社、1964)を参照。

³ 「緊跟偉大統帥毛主席 乘風破浪永向前」(『人民日報』1969年7月17日)、「全国軍民熱烈慶祝毛主席暢游長江四周年決心沿着毛主席指引的革命航道奮勇前進」(『人民日報』1970年7月17日)、「到大風大浪中鍛鍊身體鍛鍊意志」(『人民日報』1971年7月16日)、「全国軍民熱烈慶祝偉大領袖毛主席又一次暢游長江五周年 響應毛主席偉大号召到大風大浪中鍛鍊身體鍛鍊意志 沿着毛主席革命路線在三大革命運動實踐中破浪前進」(『人民日報』1971年7月17日)など。

⁴ 『毛沢東選集』所収。1964年人民出版社発行のものを参照した。

⁵ スローガンが文中に引用されている事例については、本稿でも数多く紹介している。また、それが絵に描きこまれている事例については、図8や図9(後出)がそれにあたる。なお、プロパガンダ絵画の、スローガンを伝える媒体としての機能については、武田雅哉『新千年図像晩會』(作品社、2001)「明瞭に描きこまれた文字と肖像」(130-134)に言及がある。

⁶ 駱思穎「在大風大浪成長：新中国美術中的兒童形象」(『美術館』2008年第2期)、譚天 駱思穎「論“大風大浪”為中心的空間寓意——對『在大風大浪中前進』等主題繪畫的分析」(『南京

芸術学院学報』[美術と設計版]、2008年2月)を参照。また、王明賢、嚴善錚『新中国美術図史(1966-1976)』(中国青年出版社、2000)においても、「大風大浪」という語が、文革期においては階級闘争の風浪をも指したことを指摘している(同書129頁)。

⁷『人民日報』はこの2日後の紙面で、10月27日の『黒龍江日報』に掲載された「活着就要拼命干 一生献給毛主席——記為搶救国家物資英勇献身的金訓華同志的光輝事跡」という記事を転載している(『人民日報』、1969年12月6日)。こうして金訓華の事績は大々的に取り上げられ、英雄として称賛されることとなった。

⁸『紅旗』(1969年第12号)。原文は以下のとおり。「在生死关头的考验面前，他想到的是“为人民服务，就是死得其所”！在为保卫祖国财产而与洪水搏斗的过程中，狂暴的巨浪三次把他卷进险恶的旋涡里，他三次顽强地把头抬出水面，斩风劈浪，继续向前猛冲，去抢救国家物资。金训华不愧是毛主席的红卫兵，他三次面临死亡的威胁，三次战胜死亡的威胁，一次比一次更高地攀上了“一不怕苦，二不怕死”的无产阶级的思想高峰。」

⁹ 原文は以下のとおり。「阶级敌人如果再兴风作浪，发动群众把他们再一次斗倒就是了。」

¹⁰ 原文は以下のとおり。「今天中午下河去游泳，一走到河边，看见河中水流那么急，心里便想，下不下呢？下去吧，这水流实在吓人。这时，我脑海中想起了毛主席的教导：“大风大浪也不怕。人类社会就是从大风大浪中发展起来的。”水急可以锻炼一个人的勇敢，机智。我跳了下去，游了几十米。」

¹¹ この絵をめぐる当時の状況に関しては、王明賢、嚴善錚『新中国美術図史(1966-1976)』(中国青年出版社、2000)、王明賢、嚴善錚「“文革”时期的知青美術」(『芸苑』2005年第2期)に詳しい。

¹² 絵はほぼ同じであるが、『紅旗』掲載の絵に描かれていた電柱は、連環画『金訓華』の表紙では描かれていない。同連環画第36コマ【図4】も同様であり、表紙絵に倣っているものと考えられる。

¹³ 内藤陽介『マオの肖像——毛沢東切手で読み解く現代中国』(雄山閣、1999)第5章「皇帝の晩年」、175-176頁を参照。なお、前掲の駱思穎「在大風大浪成長：新中国美術中的兒童形象」では、同切手の発行を1971年1月としている。ここでは、金訓華の事例において、連環画の発行時期が切手のそれに先駆けていたということを確認するにとどめておく。

¹⁴ 注8に記した記事(『人民日報』に転載されたもの)に拠る。

¹⁵ 「上山下郷」運動とそれをめぐる宣伝に関しては、前掲『文化大革命の大宣伝(上)』「下放」の章をおもに参照した。

¹⁶ 絵を描いた劉柏榮は、1972年の全国美術展に同じモチーフの絵を出品しているが、その絵では、女性の手からは『毛主席語録』が消え、その手は握りこぶしになっており、左の男性は正面を向いて描かれるようになった(前掲『新中国美術図史1966-1976』83頁参照)。同連環画はそれ以前に刊行されており、表紙の絵もそれ以前のものが用いられている。

¹⁷ 『毛主席語録』を濡らさずに持っているという点については、それが命よりも大切であることを描いているのだという指摘もある。前掲『新千年図像晩会』(作品社、2001)「溺れるものは赤本つかむ」128頁を参照。

¹⁸ この点については、牧陽一、松浦恆雄、川田進『中国のプロパガンダ芸術』(岩波書店、2000)第五章「アジア的専制アート」第四節「太陽神、毛沢東」に詳しい。

¹⁹ 李鉄梅に倣おうとする人物が描かれたポスターとして【図13】を挙げた。同図は、李鉄梅に学ぼうとする若い女性民兵を描いたものである(秋山孝『中国ポスター』(朝日新聞出版、2008)100頁より転載)。ちなみに、武田雅哉『よいこの文化大革命』(廣済堂出版、2003)によると、李鉄梅は、当時女の子たちに大人気であったという(同144-147頁)。

²⁰ 原文は以下のとおり。「想起金训华和黄山十一位英雄与激流搏斗的情景，这点风浪又算得了什么！」